

～ ショールーム化に向け IBM Power Virtual Server を導入 ～ オンプレミスのIBM iシステムを そのままクラウド化

“2025年の崖”について警鐘を鳴らした経産省の“DXレポート”が発表されてから早5年。この間、業種や規模を問わずすべてのセクターでDXの取り組みが加速し、レガシーシステムのオンプレミスからSaaSなどクラウドへの移行が進んだ。一方で、様々な理由や事情からクラウド移行が難しく、オンプレミスのまま運用し続けているものも少なくない。かつて個別企業のニーズにあわせクラッチ開発されたIBM iの基幹システムなどはその代表例だ。そんなIBM iシステムをそのままクラウド化出来るサービスがある。2020年にリリースされた「IBM Power Virtual Server」だ。本書では、400社以上のお客様にIBM i (AS/400) を販売してきたNDIソリューションズ株式会社が、自社でPower VSを導入しオンプレミスシステムのクラウドリフトに成功した事例について移行チームの面々にお話を聞いた。

目次

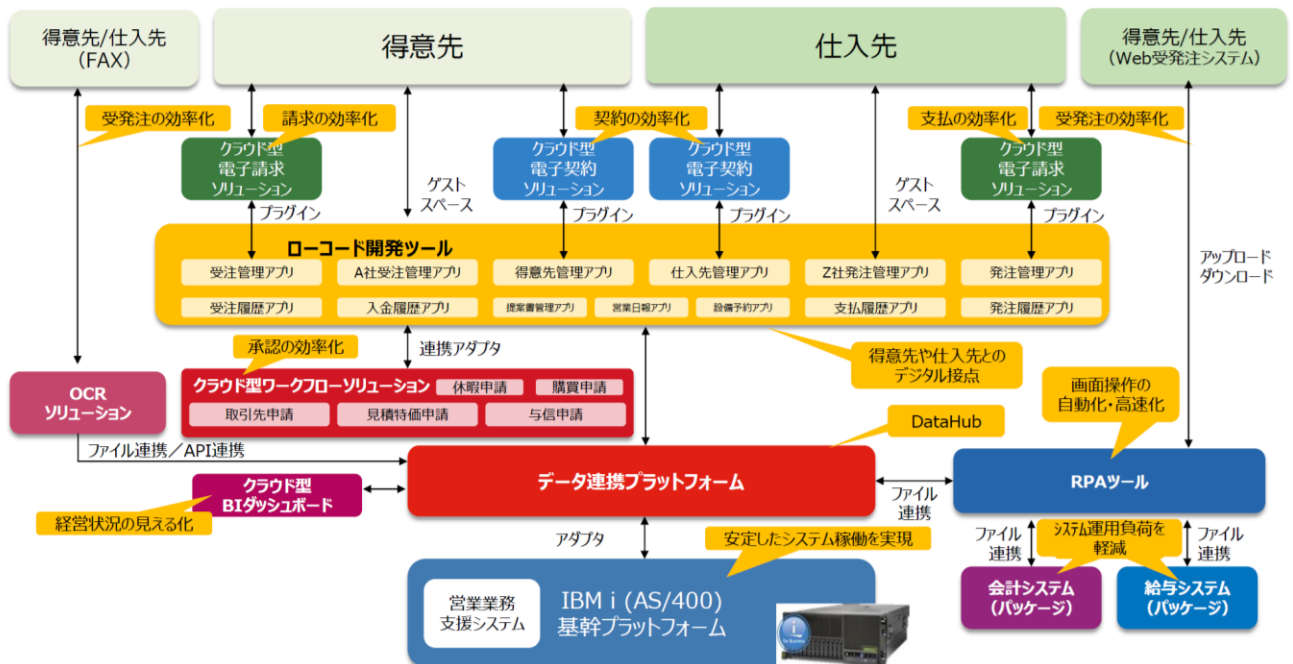
情報インフラのモダナイズに取り組むが、一部営業系の業務システムにIBM iが残る
インフラのサポート終了が迫るなか、Power VSへのクラウドリフトを決断
技術検証を繰り返し、Power VS移行を完了
データセンターの一部ラックを返却し、コスト削減に貢献
蓄積したノウハウを元に「IBM Power Virtual Server構築サービス」を提供予定

情報インフラのモダナイズに取り組むが一部営業系の業務システムに**IBM i**が残る

1981年の創業以来、IBMオフコンの基幹系システムやネットワークなど、インフラ構築を中心に手がけてきたNDIソリューションズ株式会社（以下、NDIS）。IBM iの販売実績は400社以上に上り、自社でも様々なシステムをオンプレミスで運用してきたが、2017年以降、各種社内システムのSaaSなどクラウドサービスへの移行を進めてきた。その目的がDXによる自社のビジネスの変革と生産性向上にあることは言うまでもないが、自社での成功体験をベースとし、IBM iユーザを中心とする顧客のDX推進に向けた提案力強化を狙った動きでもある。すでに、請求や契約、ワークフローなどはクラウドサービスに切り替え、フロントシステムについてはローコード開発ツールを導入してアプリ化。会計システムや給与システムもパッケージ製品に移行し、それぞれを疎結合で連携している。RPAやOCR、BIなども導入し、かなりの領域でデジタル化と自動化を実現してきた。

一方で、一部営業系の業務システムについては、「SaaSに移行するとこれまでできていたことができなくなる」「社歴の長い社員を中心に使い慣れたシステムの変更に對する抵抗感が強い」といった理由から、スクラッチ開発のIBM iシステムを運用していた。「ローコード開発ツールで同等の機能を有するシステムを新たに開発してIaaSにのせるという選択肢もありますが、膨大なコストと工数を要する一方で、安定性・安全性など現状よりすぐれたものになるとも限らず、モダナイズの対象外として運用を継続していました（開発チーム）」

■ NDISにおける情報インフラモダナイズの取り組み状況（Power VS導入前）



インフラのサポート終了が迫るなか Power VSへのクラウドリフトを決断

こうしたなか、データセンターにてオンプレミスで運用していたIBM iシステム（インフラ）のサポート終了が、2022年9月に迫ってきた。「会社として、DX実現に向け情報インフラをモダン化する大方針を定めている以上、もはやオンプレミスでのインフラ更新は考えられない。サポート終了まで1年を切った2021年10月、白羽の矢を立てたのが『IBM Power Virtual Server（以下、Power VS）』でした（開発チーム）」

Power VSはIBM i/AIX/LinuxのLPAR環境を従量課金で提供するIaaSサービスで、日本では東京リージョンにて2020年11月から提供開始されている（その後2022年3月に大阪リージョンでも提供開始）。オンプレミスの既存システムをそのまま（開発不要で）クラウド移行でき、オンプレミ

スから脱却したいが、すぐれた使い勝手や機能、安定性も捨てがたい…というIBM iユーザーにとっては待望のサービスと言える。

NDISでは、「クラウド移行しても現状の使い勝手や機能をそのまま維持することができる」、「基本的にインフラ環境はオンプレミスと同じで移行後も安定運用が期待できる」、そして「IBMが提供するサービス」といった点を評価。さらにPower VSについては、多くのIBM iユーザーが高い関心を寄せており、先んじて自社で導入し、ノウハウを蓄積することで、お客様の移行ニーズに対応した支援サービスを提供できると考え、Power VS導入を決断。既存IBM iシステムのクラウドリフトに向けて動き出した。

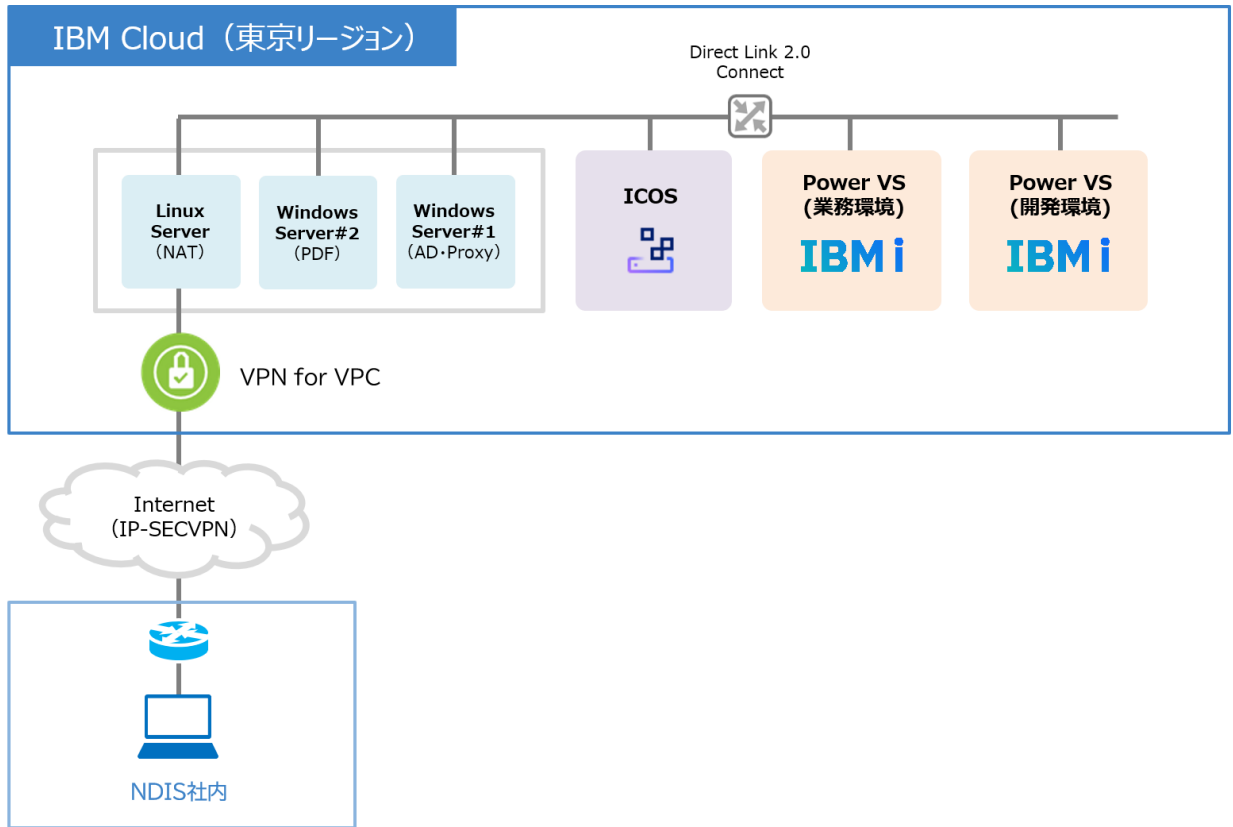
技術検証を繰り返し、Power VS移行を完了

2017年当時にはなかったPower VSの登場により、開発不要でクラウドリフトが可能になったとはいえ、その後の環境構築～移行は決して簡単ではなかった。NDISとしてははじめてのプロジェクトで、当然社内にノウハウやスキルを有するエンジニアはいない。また、サービスを開始して間もないこともあり、エンジニア向け情報共有サービスなど限られた情報を頼りに手探りで進めざるを得なかった。

当初は年度末の2022年3月末までに移行を完了する計画であったが、試行錯誤を繰り返した結果、Power VSへの移行が完了したのは、サポート終了1ヶ月前の2022年8月であった。「Power VSは今回がはじめてで時間がかかってしまいました。特に、オンプレミスにはない、Power VSに接続するネットワーク環境構築に手間取りましたが、サーバやストレージだけなら、オンプレミスよりも圧倒的に短時間で簡単に環境を構築できます。オンプレミスで機器を選定して調達し構築するとなると、手元にモノが届くまでに結構時間がかかるうえに、最近では半導体不足や為替変動などの影響で、本当に必要な時に、最適な機器を、適正価格で調達できるか不確実な情勢です。そのあたりを心配しなくてよいのはクラウドサービスならではのメリットです（移行チーム）」

ちなみに、今回の移行で実現したシステム概要は下図の通りだ。NDIS社内からは、IP-VPNでIBMクラウド（パブリッククラウド）上のプライベートクラウド環境に接続。そこからさらに、営業系業務システムを移行したPower VS環境及び、データバックアップ用のオブジェクトストレージ（ICOS※）に接続する形だ。※IBM Cloud Object Storageの略

■ NDISにおけるPower VS移行イメージ



データセンターの一部ラックを返却し コスト削減に貢献

オンプレミスのPower iシステムをPower VSに移行することに成功したNDIS。オンプレミスと同じインフラ環境をクラウド上に構築できるPower VSによって、クラウドに上げるための開発やテストなどに時間や工数をとられることなく、シンプルかつスムーズに移行することができた。サポート終了前にクラウドリフトできたのはPower VSによるところが大きい。

コスト面では、契約していたラックを2基返却することでデータセンター費用を削減したほか、IBM Cloudとしてセキュリティ対策などがマネージド型で用意され、インフラ刷新にともなう付帯コストも最小化できた。コスト面だけでなく運用管理面についても効率化メリットが大きいという。

Power VSへのクラウドリフトでは、使い勝手や機能などは一切変わらず、監視など運用管理についてもオンプレミスのノウハウをそのまま継続でき、エンドユーザにも情シス部門にもストレスがかからない点もメリットとして見逃せない。

蓄積したノウハウを元に 「IBM Power Virtual Server構築サービス」 を提供予定

NDISでは、今回の移行プロジェクトで得たPower VSに関するノウハウを元に「IBM Power Virtual Server構築支援サービス（仮称）」の提供を開始した。サービス範囲はクラウド利用のための初期環境構築で、下記5項目の作業をカバーする（データ移行は、別途 IBM i の標準構築メニューで対応）。

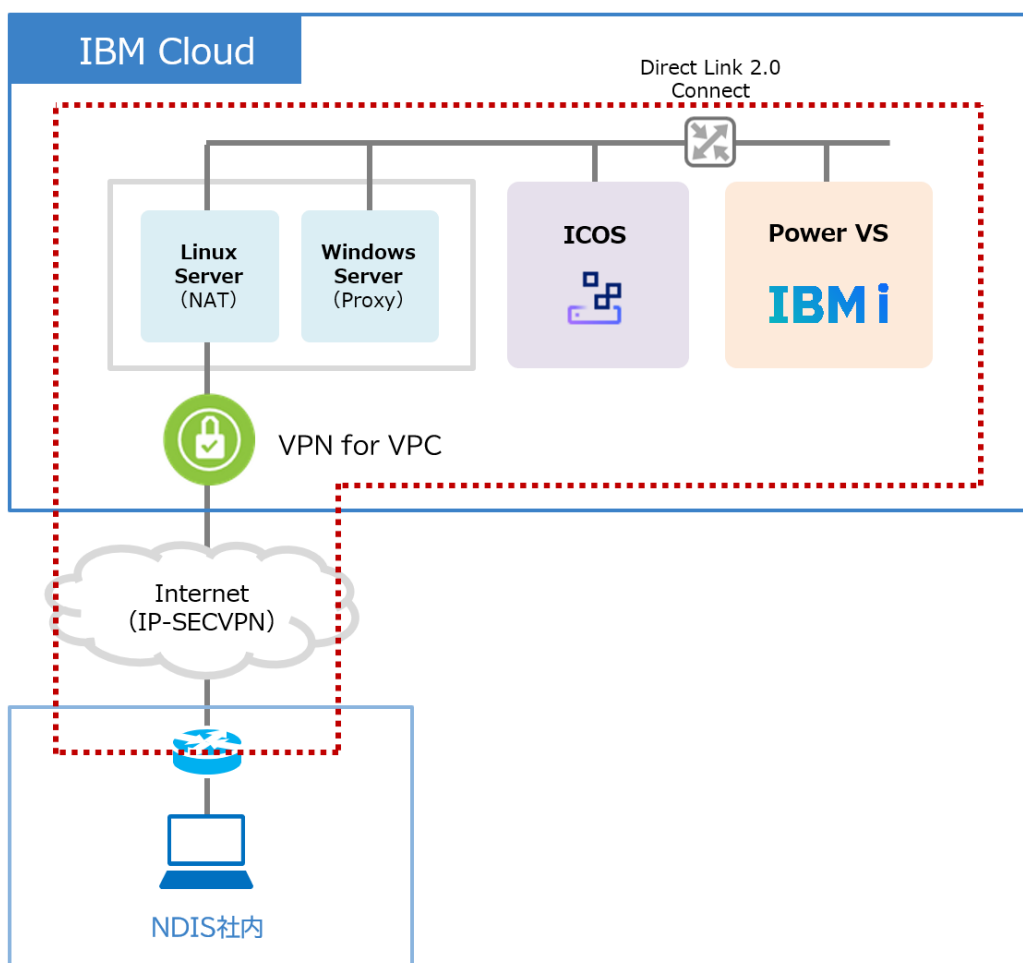
1. IBM Cloud設計（テナント/ネットワーク/サーバインスタンス/バックアップ）
2. IBM Cloud構築（テナント契約/ルーターセットアップ

/IBM Cloud上のネットワーク構成/各種インスタンス構成)

3. IBM i環境構築
4. ネットワーク疎通、IBM i稼働チェック、ICOS接続
5. 環境引き継ぎ

NDIS同様、IBM iシステムをPower VSにクラウドリフトしたいが、ノウハウがなくて不安という企業は是非お気軽にご相談いただきたい。

■ 「IBM Power Virtual Server構築支援サービス（仮称）」の作業範囲





NDIソリューションズ株式会社

〒108-6110 東京都港区港南 2-15-2 品川インターシティB棟 10F

URL : <https://www.ndisol.jp/>

Mail : ndi.marketing@ndisol.com